

久生十蘭全集

VI



久土一朗全集 VI

編集委員 大佛次郎 荒 正人
安部公房 中井英夫

三一書房

久生十蘭全集 VI

一九七〇年四月三十日 第一版第一刷発行
一九七四年六月三十日 第一版第二刷発行

編者 大佛次郎・荒 正人・安部公房・中井英夫

© 久生幸子 一九七〇年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社 三二書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(二九一)三二一三〜五番

振替東京八四一六〇番

郵便番号一〇一

印刷 文栄印刷株式会社 製本 株式会社鈴木製本所

(第五回配本)

目次

ノンシヤラン道中記 7

八人の小悪魔 9

合乗り乳母車 21

謝肉祭の支那服 34

南風吹かば 47

タラノ音頭 59

乱視の奈翁 70

アルプスの潜水夫 83

燕尾服の自殺 95

墓地展望亭 101

あなたも私も 149

肌色の月 283

解説 尾崎秀樹 339

久生十蘭全集

Ⅵ

ノンシャラン道中記

八人の小悪魔

一九二九年の夏、大西洋に面した西仏蘭西の沿岸にある離れ小島に、二人の東洋人がやって来た。質朴な島の住人が、フランス語で挨拶して見たら、相応な挨拶をフランス語で返すので、これは多分フランス人なんだろうと決め込んで、以来、多少の皮膚の色の曖昧さや、少し黒すぎる髪の毛の色には頓着しないふうであった。

さて、この二人の東洋人が、この夏を過すことに決めた島というのは、大西洋の中に置き忘れられた絶海の一孤島であつて、そこには、風車小屋と、羊と、台ランプと、這い藨薇と、伊勢海老と、油漬鰯の工場と、発火信号の大砲と、「海の聖母像」と、灯台と、難破した FORLUNE 号の残骸と、——そのほか、風とか、入江とか、暗礁とか、それ相応のものの外、計らざりき、災難というもののさえあつたという次第。

そもそも、災難の濫觴とも、起源ともいふべきその宿とは、先年、鰯をとるといって沖へ出たまま、一向報りをよこさぬという七歳を頭に八人の子供を持つ、呑気な漁師の

妻君の家の二階の一室で、寄席の口上役のような、うつとりするほど派手な着物を着たこの家の若後家が、敷布と水瓶を持って、二人の前に罷り出た時の仁義によれば、この部屋は、かつて翰林院学士エビナック某が、この島、すなわち「ベリイルランメール島の沿革および口碑。——或いは、土俗学より見たるB島」という大著述を完成した由緒ある部屋であつて、またこの窓からは、ありし日、サラ・ベルナルが水浴をしているのが、手にとるように見えたこと。さて、今ははや、見る影もないこの衣裳戸棚ではあるが、これは父祖代々五代に亘って受け継いで来た長い歴史のために破損したのであつて、ここに彫り込まれた三人目の漁夫は、大祖父によく似ていると皆が評判すること。お二人がお寝みになるこの寝台では、お祖父さんもお祖母さんも、みな安らかに最後の息を引き取ったこと。もし牛乳がお入用ならば、毎朝一、立ずつ扉のそとへ置いとくつもりであること。これはぜひ一度ご試飲を願つて、そのあとで、お断わりになるなり、お用いになるなりなさるのが至当であつて、何故ならば、この島の牛どもが喰べる苜蓿は塩気を含んでいるため、勢い牛乳も多少の塩味があるというので評判であること。乾物のお買物は、広場の角の家が一番安く、パン屋はその向いの青ペンキ塗の家、酒屋はその向いの「蟹の夢」屋という家に限ること。なぜなれば、この三軒は一法の買物ごとに福引券を一枚ずつくれるからで、福引券が貯りましたらば、ご出立の際、わたく

しにいただかしてもらいたいこと。もし、この炉で煮焚きをなさるならば、火をお焚きになる前に、この火掻きで、煙突を二三度ひっぱたいていただきたい、と申すわけは、一昨年からこの煙突の中に雀が二家族巢を作っているからであつて、もしかして、雀に火傷でもさせたら、さぞ寝覚めのお悪い事であらうと思つて、ご注意までに申しあげること。海の方へ向いたこの窓はよく閉まらないが、決して無理に閉めようとしてはならないこと。実は、これを余り手荒く扱うと、窓枠全体がそのままだなかの頭の上に落ちて来る危険があるのであつて、現に昨年の夏も、下宿の独逸人がこの窓枠の下敷きになつて、一夏中、片足を使えないほどの手ひどい目にあつたこと……

折柄、窓のそとは満潮で、あぶくを載せた上潮の蜚が、くどくどと押し返し、巻きかえし、いつ果てるとも見えないう有様であつた。

二、朝日が昇れば川柳は緑に染まる。タヌの水浴着を持たされたコン吉が、漠然たる眼をしばたたきながら、入江伝いに來て見れば、鰯の腸の匂いを含んだ、やや栄養の良すぎる朝風が糸杉の枝を鳴らし、蕭条たる漁村に相応しからぬ優雅な音をたてているのだが、コン吉はそれほどまでに深く自然の美観を鑑賞する教養がないためか、いたずらに、臭い、臭いといつて顰蹙し、この島における印象は、どうも飛んでもないところへ漂着したものだといふところに落着いたのであつた。

タヌとはタヌキの略語であつて、一口にいえば、その外觀がなんとなく狸に似ているという、はなはだ平凡な連想から來ているのだが、この人物は、お天気で、喧嘩早くて、調子を外した歌を真面目な顔をして唄つたり、成年期に達している淑女の分際をも顧みず、寝ているコン吉の顔の上を跨いで通つたり、本業とする天地活写の勉強においても、とかく、静物は動物となり、動物はまた要するに、何が何やらわからないという、はなはだ技術的に飛躍した天稟天才を持ち、そのほか、百貨店の美しい売子の前で、しばしば故意にコン吉に恥辱を与えろとか、日常の買物は、人参の果てから下着の附け紐に到るまで、男子としてははなはだ不本懐な労役にコン吉に従事せしめろとか、——コン吉にとつてはとかく腹の立つことばかり。

想えば、快活な避暑地や、華々しい遊覧地も数多くあるものを、何を選り好んで、辺鄙閑散、いたずらに悠長な、このような絶海の孤島へ到着したかといへば、これまた端倪すべからざるタヌの主張によつたもので、その主張の根源は、ある一日、たまたまセヌの河岸の古絵葉書屋で、この島の風景を発見したというのに他ならないこと。

追ひ追ひはげしくなる陽射しのしたで、コン吉は、セント・エレーヌに流されたナポレオンの心情もかくやとばかり、悲憤の涙にくれるのであつた。

三、災難は猪打ち銃の二つ玉。と申しますが、全くのことでございます。いまでも申しました通り、そのジュヌヴィ

ウ伯爵の夫人^{おく}さまは、まことに優しい方で、編物針をくださるときには毛糸を一束くださるとか、粉石鹼をくださるときには下着を一枚そえてくださるとか、財布をくだすったときには、五法^{ゴフ}の銀貨までそえてくだすったような方でございました。災難^{サイナン}の起るときというものは仕様のないもので、その日もいつものように、お坊ちやまを乳母車に乗せて、ビュット・モンマルトルのミミの菓子店へ出かけたのですが、わたくしがちよつとミミと話し込んでいる隙に、お坊ちやまが、箱の中にあつたミミのボンボンをつかみ出して、恋の辻占^{こいのつじうらひ}が刷つてある、あの名代の包紙のまま、一息に嚙み込んでしまつたんでございます。さあ、お邸へ飛んで帰つて、それから医者を呼ぶやら、灌腸^{かんじやう}をするやら、大騒ぎになりましたが、本当に神様も無慈悲な方でございマス。肝心の館の方は出て来ずに、出なくてもいい恋の辻占が、まるで街角の郵便函へ入れた手紙のように、生々と新しいままで下の口から出てまいつたんですが、それがまた生憎と、一字ずつはつきりと手に取るように読めるんでございます。今でも覚えておりますが、その恋の辻占の文句は「旦那の接吻は兎の早駆け」と申すんでございました。そばにいらした旦那さまは、急に髪の毛の中まで真赤になつておしまひになるし、わたくしとても、このうえどうしてのめのめと、お優しい夫人さまに毎日顔を合せることができません。それから流れ流れて、この島で八人の子供を産むまでの難儀の数々、筆にも紙にも尽せるものでは

はございません。その連れ合いというのも、去年の春の日暮がた、鰯をとるといつて沖へ出たまま、乗つて行つたボートだけを帰してよこして、自分はいまだに報り一つよこさないという呑気な話、とうてい末始終手頼になるような男ではございません。ところが、あまり不幸なわたくしの境涯に、多分神さまもお憐れみ下すつたのでございましょう、このごろ、わたくしは胸の底が疼くような、なま温いような、擦いような、……小夜ふけに寢床の中で耳を澄ましますと、わたくしの鼓動が優しくコトコトと鳴るのでございます。と申しますのは、もうお察しのことと思ひますが、何しろ氣立てのいい床屋の若い衆なんできて、それが乗馬ズボンをはいて歩いている時なんてものは、いっそ脹つ脛にかみついてやりたくなるほど、いい様子なんでございマス。それが今度、海を渡つたキブロン^{キブロン}の波止場の近くへ、親方から出店を出さしてもらひまして、一升五法のオオ・ド・コロオニユだの、マルセーユできのコティイの粉白粉だの、……これは内証の話なんですが、ま、そういう商売上手なんでして、わたくしに、ぜひ一度店を見に来て、香水棚の下にカアテンを廻したり、鏡の下に花模様を入れたりしてくれるように頼んでまいつたんでございます。お願いと申しますのは他でもございませぬ、如何でございましょう、往きが四時間、復えりが十時間、向うにいる日を一日と見て、たった二日だけ子供たちをお預りくださるわけにはまいりますまいか。喰べ物の好みはいわず、贅

沢もいわず、朝は早起き、戸外へ出るのは何より嫌い、二番目の女の子などは、背中の真ん中にあるホックまで独りで掛けるんでございます。身体が丈夫なことは、まるでブリキで作った騎手のようで、落しても転がしても、決してこわれるようなことはないんでございます。物覚えのいいのは母親似でございまして、一月生れの末の子などは、もう「仏蘭西万歳」といえるんでございます。如何なものでもございましょうか？ これはまあ夫人さまさつそくご承知くださいまして有難う存じます。もう、マリアさまのようなあなたさまに、たとえ一日でも二日でも、お預りを願うというのも、ひとえに日ごろの信心のお蔭だと有難涙にくれる次第でございませ。では、お休みなさいませ。

四、五位驚のプロムナードは泥鎗の悩み。懇篤重厚なるジェルメエヌ後家の述懐、涙ぐましく苦業の数々。一つとしてこれを聴く人の断腸の種とならぬものはないのだが、とかく漠然たるコン吉の大腦には、ただもううるさいと響くばかり。涯てなき長広舌の末、この島全体の空氣に、何やら相応しからぬ艶めかしい匂いを残して、若後家が階下の居間に引きさがつたのち、はて、今の話の筋道は一体どんなことであつたのか、と首をひねってタヌの様子をうかがうところ、どうやらこれは並々ならぬ災難の前兆、悪運の先駆けと思わざるを得ないというのは、粗い毛織りの服を着たタヌの胸が優しげな溜息をもらし、洞窟の奥の黒曜石のような眼玉が、あらぬ虚空をみつめ、何やら深い物想

いに耽っている様子。この溜息こそは、例の端倪すべからざるタヌの空想、即ち災難の前触れ。これは油断のならぬ事になった。急いでそれ相応の防禦の道を講じなくてはなるまいと、コン吉が、まずそれとなく鹿爪らしい咳ばらいをし、さて、おもむろに舌を動かそうとしたとたん。

コン吉よ、君は子供と鯨の子を何より嫌いだといひ張るが、それは多分、天気晴朗の日に空から降つて来たような、天真爛漫な田舎の子供を知らないからなのであらう。まして、ここは海岸の事だから、帆立貝のなから生れたような子供だの、鯨の背中に乗つて流れ着いて来たような、うっとりするほどロマンチックな子供も居るに違いないのだ。あたしは、もう今晚は楽しすぎて眠ることができないであらう。コン吉よ、君はどうぞ、寝台の帳を閉めて、あたしに君の顔を見せないようにしてほしいのだ。あたしの楽しい空想や計画は、君の顔を見ると、不思議に破れてしまうからだ。とりわけて、今晚だけは軀をかかない様にしてみたらえないであらうか。また時々、夜中に君を揺り起こして、あたしの計画を聞いてもらうつもりだが、その時はどうぞ、夢のような声で、優しくあたしに賛成してもらいたい。

そういうわけであつたのかと、コン吉は今さらながら驚くばかり。あれやこれやと周章狼狽して、頓に言葉も出ない有様。磨き粉の買い出しから、子供の豆の始末まで、はるばる巴里から手懸けに来るとは、なんたる因果、身の不仕合せ。はるか東のはずれの国にいる悪友共へ、この島

の牡蠣酢が乙でござるの、海老の刺身で一杯飲めると、いわでもよい法螺を絵葉書の裏にぬたくって、郵便船に托したのはつい昨日のこと。見ると聞くとは大違いとは、さてはこのへんのことをいったものであらうと、首をかかえて嘆くばかり。

五、潮騒はサラサラ発動機船はポンポン。鷗は雑巾のような漁舟の帆にまつわり、塩虫は岩壁の襷で背中を温める——いとも長閑なる朝景色。さて、タヌの声に応じて、廊下の襷に背中を擦りつけ、目刺しならびに並んだ八人の子供というものは、どれもこれも、ゆくゆくはアフリカ行きの流刑船の水夫になるとか、闘技場の暗闇に出没して追剥を働くとか、女ならば碁碁縞の服を着て、けちなルウレットを廻す緑日の廻し屋、あるいは部落にたぐまる吸殻屋の情婦にでもなりかねぬ末たのもしい面相骨柄。いずれも唇をへの字に結び、うわ目でじろじろタヌを見あげながら、むつり押し黙っているばかり。タヌがロマンチックな音色で、いろいろ愛想をすればするほど、じりじりと後退りをする。猫のようにぶうとやる、踵で壁を蹴る。今度は品を代えて、巴里仕込みの上等のボンポンを口の中に入れてやれば、一舐り舐ってぼいと吐き出すという情ない仕方、世が世であれば、帽子掛けへ猫つるしにつるすとか、どこか固いところをコッソンと一つやるとか、コン吉はそれくらいに思っじりじりするのだが、タヌは昨夜からの優しい夢がまだ醒めぬと見え、襦袢っ屑の巢の奥から、眼だけ出

した二十日鼠のようなこの子供たちを、世にも愛しいものを見るような眼付きで眺めながら、根気よく無益な会話を続けているのであった。

「君、キャラメル好き？」「ノン」

「おや！ では、バナナですか？」「ノン」

「天婦羅などはどうですか？」「ノン」

「パリの絵葉書をあげましょう」「ノン」

「あんたは色鉛筆。あんたはリボン、ね？」「ノン」

「驚などはどう？」「ノン」

「じゃ、お馬ですか？」「ノン」

「おや、おや！ あんたはインクで髯を書いたのですね？

これは立派な伍長さんだ」「ノン」

「では、大統領かも知れないな」「ノン」

「ええと、その絵描き、つてのが汽船だけ書いて、ボートを描くのを忘れたものだから、船が港へ着くたびに、船長は陸まで泳いで行かなきゃならない、っていうの。なにしろ、波だつてあまり上手く書いていないから、泳ぐにしたって楽じゃない、つて。……面白いでしょう」「ノン」

「おや！ ではお話をよしにして、お医者ごっこをしましょうか？ あたしが……」「ノン」

「そいじゃ、これからギニョールの始まりだ。ほら、右手がギニョール、左手がキャラウズなの。……さあ、始まり、始まり！」

キャラウズ——ギニョールさん、ギニョールさん。

ギニョール——あたしはおりませんよ。
 キャヌウズ——これはしたり。いない貴方が返事をするとは。

ギニョール——したが拙者は出られないのでござる。なぜと申せば、拙者の股引めを薦がさらってまいったゆえ。

キャヌウズ——でも、ここに、あなたに宛てた書留が一通。

「ノン」

「ははあ。では、前芸はも早これまで。これよりはご馳走の食べくら。……一番沢山食べたひとは、王様からご褒賞が出るという話」「ノン」

「さあ、さあ、あちらには鶯鳥の焼肉羹とモカのクレム。小豚に花玉菜、林檎の砂糖煮。それから、いろいろ……」

「ノン」

「じゃ、どうすればお氣にいますか？ いっそ、あたし、あっちへ行っちゃいましょうか？」

「ウイ！ ウイ！」

六、八月六日満潮午後三時干潮午前同刻。細い毛脛を風になびかせ、だんだら模様の古風な水浴着を着ておよんだコン吉は、蜘蛛の子のような小さい紅蟹が這い廻る岩の上へ、腰を掛けたり立ち上ったり、まだ明け切らぬ海上を照らす浮き灯台の点滅光をわびしげに眺めながら、かねて貧血症の唇を紫色にし、毛を揺られたクリスマススの七面鳥

のように、全身を鳥肌立てながら、片足を水に入れては躊躇し、また片足を水につけては首をひねり、何やらすこぶる煩悶の体に見えるのは、実に次のような仔細のある事であつた。

ジェルメエヌ後家の約束に違わず、この八人の悪魔の突撃隊は、毎朝六時に眼を覚まし、真紅になってあめき立て、手鍋をたたき、鬘狗のように吼え、歯ざしりし、当歳の赤ん坊までが、「フランス万歳！」と、廻らぬ舌で叫びながら、コン吉とタヌが階段の上り口に構築したがりくた道具の鹿砦を乗り越え、押しもみひしめいて階段を押し昇つて来る有様は、巴里市民諸君のヴェルサイユ宮殿乱入の件もかくやと思われて、ルイ十六世ならぬコン吉も、さながら身の毛もよだつばかり、ついには、蒲団の洞穴の奥に身をすくめ、魂も身にそわぬ二人を引き出し、馬乗りになつて眼玉の中へ指を突っ込む。腹の上で筋斗を切る、鳩尾を蹴っ飛ばす、寝巻の裾へ雑猫を押し込むという乱暴狼藉。別の一隊はと見てあれば、六絃琴を踏み台にして煖炉の棚に這いあがるもあり、掛時計と一緒に墜落するもあり、インキを振りまくもの、窓の外へ枕を投げ出すもの、鞆の中を引っかけ廻す、眼鏡を踏みつぶす、果ては羽根布団の腹を裁ち割って、その臓腑を天井に向つて投げつければ、寝室はたちまち一面の銀世界。さすがのタヌも、いまは早や天国の夢も醒め果て、衣袋戸棚の中に避難して、戦後のソムの村落にも劣らぬ、惨憺たる光景を眺め渡しながら、